

令和5年度大学・附属学校園連携事業推進経費 成果報告書

<p>所属名</p>	<p>附属高等学校天王寺校舎</p>
<p>研究課題名</p>	<p>附属天王寺校舎発CLIL教材の開発</p>
<p>研究課題概要</p>	<p>令和4年に高等学校SSH学校設定科目「科学英語」（2年生30名が履修）にて作成した成果物を基礎に、令和5年度に教員がCLILのアプローチで教材開発を行なった。</p> <p>【令和4年度】          取り組みの背景となる令和4年には、以下の項目で教材を作成するように生徒に指示をした。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>得意分野で1つ教材を作成すること</li> <li>各Unitの執筆については、Vocabulary, Content, Quiz, Self-assessment Check という項目で作成すること</li> <li>Vocabularyの習得のためにICTを活用し、Quizletを作成すること</li> <li>中学校または小学校教員が授業の帯授業で使用できるように、4択問題を作成すること</li> </ol> <p>生徒個人が教材を作成した後、生徒の有志による編集チームを立ち上げて、書式の調整、Contentにある文章のリーディングを録音したQRコードを添付した。</p> <p>【令和5年度】          生徒作成教材を基礎に、教員が題材の選抜と編集作業を行なった。編集の過程で、CLILの授業展開により適合できるように、各UnitのはじめにAims（授業の目標を知る）の項を追加し、最後にはDescribe（学んだことを文章で表現する）の項を追加した。また、より実用的なものに近づけるために、各専門分野の大学教員にも添削を依頼し、用語の使い分けなどの指導をいただいた。</p> <p>作成した教材の1つのUnitを、附属中学校3年生（4クラス144人）を対象に出張授業として実践を行なった。用いたUnitは、中学2年生時の理科の授業で既習の酸化還元反応とその化学反応式に関するものである。授業では特に専門用語に着目し、接尾語に気づかせる語彙の学びから、このUnitの概念理解に繋がる酸化銅の還元方法について科学反応を英語で説明させる展開とした。授業実践を通して、英語と理科の既習の内容がつながるとともに、違った視点で理科を学び理解する楽しさを中学生が感じたことがわかった。</p>
<p>研究課題の構成員 (リーダーに※)</p>	<p>乾 まどか（附属高等学校天王寺校舎）※          赤木 登代（以下多文化教育系）          箱崎 雄子          平川 尚毅（理数情報教育系）          井村 有里（以下附属高等学校天王寺校舎）          山井 惇平          深澤 義成          山口 耕司</p>